

江戸期の富士登山にかんする二つの写本

——『隔搔録』と『富岳雪譜』——

住谷 雄 幸

はじめに

なぜ山に登るかと聞かれると、マロリーの言葉を引用して、「山がそこにあるから」と答える人がいる。マロリーは、第二回エベレスト遠征後の講演会で、「なぜエベレストに登りたいのか」と聞かれ、それに答えたのが有名な「Because it is there!」という言葉なのである。本多勝

一は、「彼は世界最高峰としての『エベレスト』に登る理由に対して答えたものであって、『山に』登る理由を説明したのではない。」（『冒険論』）と断言し、「処女峰エベレスト」に登ることは、他人のやらぬことをやるという創造精神から出発した冒険的行為で、彼は、そこに登山の意義を見出している。

一九二四年六月八日、マロリーは、アーヴィンとともにエベレスト山頂にむかったまま行方不明となった。深田久弥は、この悲劇を大著『ヒマラヤの高峰』の中で淡々と描いた。その彼も、生涯山に登りつづけ、昭和四六年、茅ヶ岳の一角で急逝した。多くの愛好者をもつ『日本百名山』は第一六回（昭和三九年）読売文学賞に選ばれたが、受賞に際して、深田久弥は、山に登る理由を次のように記している。

「私は山が好きだから、骨董を愛する人が骨董を見ると目の色が変わるように、山を見ると心がたがぶる。どんな山でもいい。五〇年、私は山をながめ、山へ登ってきた。」（昭和四〇年二月六日付読売新聞）

私も、ここ数年、かなり頻繁に山へ登るようになった。尤も、四〇歳を過ぎてから山登りに熱中し始めたので、積

という項目があり、「今モ年々ノ詣人ヲ平均スルニ吉田ヨリ登ル者一年八千人。其他ハ駿州ノ三口ヲ合シテ是ニ相伯中スト云ヘリ」とある。この本は、文化一三年（一八一六）に書かれたもので、当時の人口が約三〇〇万人、しかも、女性は庚申の年に五合目までしか登れなかったことを考えると、一年一万余千人という登山者は、かなりの数である。

この本は、江湖浪人月所録と記されているが、月所の伝記はほとんど分っていない。序に森嶋弥十郎の友人であることが記されている。この弥十郎は、字を子与といい、南都留郡谷村の人で、代々郡内織の売買に従事した豪農の家に生れた。年少の頃林正良に学び、後に昌平塾に遊び、郷里にもどった後も、営利をはなれて育英に力をつくした。天明の大飢饉の際、三九〇俵の米を提供して困った人々にほどこしたというから義侠心にも豊んでいたのであろう。子与は、文化年間、甲府勤番支配松平定能の依嘱を受け、『甲斐国志』の編さんにあずかり、都留郡の部分を担当した（注一）。月所は、文化一三年（一八一六）、子与のところへ客となり、旧暦六月朔日、富士の山開きの時期に出合った。当然富士登山のことが話題になったのであろう。しかし、月所は極端に潔癖で、山上の室の不潔な話を聞くと登る気にもならなかった。さりとて江戸に帰った際、話題にことかかと思ひ、子与の著わした都留郡志の富士山の項に

手を入れることを思いついた。地元の人や講中登山の人たちにも山上のことを聞き、書きあげたものが『隔搔録』なのである。

子与の記したものは、豊富な資料に基づいて、客観的に記述されているが、全体として、歴史的考証、山中の様子などがやや混然として記述されているのに対し、月所のもの、一合目ごとに区ぎって記してあり、しかも、記述が簡潔で、登山の案内という点では、子与のものより数段まさっている。ただ、眺望に関する記述は、登った経験がないだけに決定的に弱いといえる。一例として、八合目の部分を対比してみよう。

『甲斐国志』「八合目ハ所レ謂大行合ナリ、須走ロヨリ登ル者モ此ニ会ス。小屋四字アリ。凡ソ登山ノ者早天ニ吉田ヲ発シテ日暮此ニ着ス、須走ロモ亦同シ、或ハ烏帽子岩ニ宿スルモアリ。此ヨリ下瞰スレハ中腹ヨリ下ハ皆平地ノ如ク見ユ。日暮ハ西天ノ雲紅色ニシテ綿ヲ散セルカ如ク千万里ノ間ニ渺漫タリ。夜ニ入り四鼓過ルマテモ猶ホ如此、故ニ夜更ケニ至ルモ不レ暗。八鼓ヨリハヤ東方明ニナリ、横雲ハ万里ノ海上ニ靡キ、其間ニ島ノ如キモノ数限リナク見ユ。漸々ニ紅雲東海ニ滿ソレトモ日出マテハ猶數刻ノ間アリト云」

『隔搔録』「八合目 駿州須走口此ニ合シテ一路トナル故ニ大行合ト云フ。吉田ノ管スル小屋五軒、内大小屋ト云フ

者一軒、須走ノ管スル小屋二軒アリ。渾テ此ヨリ上ハ一切
駿河ノ持分ニテ吉田ハ関スルコトナシ。登攀ノ者早天ニ吉
田ヲ発シ日暮ニ此ニ到ル、須走口モ亦同シ。故ニ此ニ投宿
スル者十二八九ナリ。打火料百六十四文、蒲団一ツノ料百
文、薄キコト紙ノ如ク冷ナルコト鉄ノ如シ。食ハ雜炊糜粥
ノ類、飯ハ餠糰ニシテ食シ難シ。スベテ籠ヨリ各人齎来ル
食モ梅干ノ外味変セザルモノナシト云ヘリ。此地暮雲白色
ヲ帯、亥ノ尅頃マテ散セザル故夜甚暗カラス、丑ノ尅ニハ
東方既ニ白ムトナリ」

月所は、室の様子だけでなく、山中の水に関して、次の
ように記している。

「スベテ五合目ヨリ上ハ薪ナク水ナシ。薪ハ五合目ヨリ
下ノ深谷ニ採リテ負擔シ上リ、水ハ氷雪ヲ持来リ屋上ニ置
キ、日陽ノ力ヲ得テ屋隙ヨリ滴ヲ桶中ニ貯フル故ニ飲ムニ
臭氣アリト云フ。余コレヲ聞キテ直ニ氣死セントス、若シ
一飲セバ乍チ下半生ヲ結果スヘシ」

霊峰富士に対する月所の評価

月所のこの潔癖さが富士登山を断念させた大きな原因で
あるが、月所には、霊峰富士に対する一つのユニークな評
価がある。興味深い内容なので、少し長いが引用してみよ
う。山頂の勢至カ窟の記述の部分である。

「此所二十八人倒シト云フ所アリ。文化八九年ノ頃、伊

勢カ尾張カヨリ、十九人連ノ道者来リ、内院ヨリ起リシ烈
風ニ吹倒サレ、唯一人免レテ、其他ハ尽ク即死セシトナ
リ。今其枯骨累々ト路傍ニアリ。是ハ仙元ノ崇リニシテ、
此者共登山ノ前前日、旅宿ニテ鹿肉ヲ喫ケルニ、一人ハ喫
ザリシト云フ。其ノ虚実ハ知ラズ。年々山中ニテ影モ形モ
ナクナルモノ三四人ヅツアリ。師職共深ク秘ス事ナレド
モ、皆非命ニ死スルナルベシ。昔ヨリ絶エヌ事ニヤ。……
此山イカナル故ニヤ、夏ハ山中ニテ人ヲ殺シ、冬ハ麓ヲ往
来スル旅人ニ、折節凍死ヲサスル也。吾邦ノ高山ニ地獄ト
称ス所各有之。独リ富士山ノミ其名聞エズ。余ヲ以テ之ヲ
觀レバ満山皆地獄ナルベシ。然ルニ富士ノ極楽トハナゼ詠
召シタ身祿殿、返答アラバキキツト承リタウ存ズル」

霊峰富士に対するまことに痛烈な評価である。

“お改め”について

この評価の是非を考察する前に、“お改め”について記
しておこう。この引用文の前半の部分は、山頂の烈風のた
めに生命をおとしたものが少くないことについての記述で
あるが、これが、いわゆる富士の“お改め”である。心の
汚れや身の汚れのある者が山に入ったとき、山神はこれを
罪すると考えられていた。帰途に精進明け（精進落ち）が
許されても、登山の前に、「鹿肉ヲ喫ス」（遊女を買うこと
の意であろう）ことは許されなかった。この人たちは、許

されざることをして山神より山に入ることを拒否され、

「お改め」に会ったのだから、この場合のように、死体はそのまま放置されることもあったのであろう。恐らく、その風景を目撃すれば、慄然たる感じになるに違いない。

『駿河国新風土記』にも、大宮口八合目胸突の部分に、「八合ニ至ル。コノ所胸突坂ト云所ニテ、是ヨリ道コトニサガシ。壁ノ如ク立ル巖石ノ間ニ足ヲカケテ登ルナリ。此辺ニハ嵐ニアヒテ、吹サスラヘテ死タルモノモ多シト聞ク。今ニ路ノホトリニ骨ナドノ散タルモアリテワビシク思フ」と記されている。この事実に対して、富士山の研究者の一人である遠藤秀男氏は、「不慮の死を『お改め』などと称して不浄者に仕立てあげてしまった富士講は、ずいぶんインテキな思想をふりまわしていたものである。そして、それをいいことに、死体の処理をなおざりにしていた富士山をめぐる人々も、いいかげんなものだった」(註三)と批判し、その原因の一つに、富士山の八合目以上は大宮浅間神社の所有地であるか否かの問題があったことを指摘している。安永元年(一七七二)、一人の行き倒れの処置は、八合目以上の所有権をめぐる訴えとなり、大論争は八年の長きにわたり、安永八年(一七七九)、幕府の裁許状によって大宮浅間の所有権が認められ、八合目以上の行き倒れ人の始末は大宮浅間で行なうことになった。

山村民俗の会の代表岩科小一郎氏は、「お改め」につい

て、次のように記している。

「彼ら(富士講の人々)は、登山者が遭難した場合でも、この定義を当てはめる。たとえば、冬富士の雪崩遭難を評して、お山開きの済まないうち登ればお罰が当ります、という。お罰はどうも感心できない評だが、しかし、一〇〇パーセント不可抗力の遭難というのはまれで、遭難者はどこかで遭難の因子を見落している場合が多い。碁・将棋でいう『読み』が足らず負けた式の、あの時こうしておけばと悔まれる遭難が、ここ数年はことに多くなった。お山開きの済まない時期に登るなら、君子危きに近づく心構えがいるはずだろう、と富士講氏はいつているのだ。心の汚れ、身の汚れは論外としても、技術的の面で『お改め』に会う人が、この頃の遭難者にはあると思うがどうだろうか」(註三)

これも、一見識であらう。

山と生活

しかし、私が『隔播録』に興味をもつのは、この引用文の後半に記された月所の富士観である。つまり、霊峰富士に対する月所の根本的な問いかけである。富士山は、遠くから眺めて憧憬の対象であっても、自然の厳しさが登拝者にもたらす危険やその周辺に生活する者にもたらす自然環境の苛酷な条件を考えると、一面的に富士山を霊峰として美化するだけでよいのかというのが月所の批判の趣旨なの

である。

戦前、日本とヨーロッパの山岳観についてすぐれた考察をした吉江喬松も、次のように記している。

「信州の温泉地なぞへ行つて見ればわかる。従来の家屋はいわゆる日本アルプスなる山嶺に面した方面は、尽く壁にして、その方面へは窓を開けない工夫がしてある。今日までの人々にとっては、その美しい日本アルプスなるものも、ただ冬期に嵐と雪とを吹き送る厄介なものに過ぎなかつたに違いない。すなわち旧来の家は尽く、この大山嶺に對しては、背を向けている」(註四)

つまり、日本人は古くから山を眺め、崇拜の対象としていたが、高峰の周辺に住む人たちにとっては、生活とのかわりから、別の山岳観を形成していたのである。

しかも、富士山の自然条件の厳しさは、山中の烈風と冬期の積雪だけではない。宝永四年(一七〇七)一月の大噴火は、中腹に宝永山を誕生させた。江戸の新井白石は、『折焚く柴の記』で、「西城に参りしに、白灰地を埋めて草木みな白く、御前に参るに天はなはだ暗ければ燭をあげて講し侍る」と記しているが、地元の被害はさらにすぎまじかつた。降りそそぐ火山礫は、周辺の田畑を埋め、須走村は一村全滅した。

この須走村について、後に詳述する『富岳雪譜』の筆者和久田寅(叔虎)は、次のように記している。

「抑此洲走(須走)ノ里ハ人家数多アリトイヘドモ、四畔不毛ノ地ニシテ五穀ヲ生ゼズ。如何トナレバ焼砂七尺ノ上ニ人家ヲ造レバ、砂七尺ヲ穿ザレバ土ヲ得ルコトナシ。サレバ田ヲ耕スハ井ヲ穿ヨリモ勞スレバ、トテモ耕スベキ良田ヲ得ルコト能ハズ。僅ニ糞土ヲ培養シテ野菜ノ類ヲ作ルノミナリト。然ルニ何ヲ營トシテ如レ此戸数(二〇〇あまりの戸数)ノ人ヲ養コトヲ得ルヤト問フニ、此六七ノ両月富士參詣ノ人ヲ宿シ、或ハ強力トナリ、或ハ山上ノ岩窟ニ入テ茶飯ノ類ヲ鬻テ得ル処ノ錢ヲ以テ終年ノ資財トスルトナリ。其余ハ僅ノ職業モアレドモ數ルニ足ラズト」

須走村のこの現実を聞いても、富士山に対する叔虎の評価は、月所のそれとは大いに異なっている。

「余嘆ジテ謂ラク、嗚呼誠ニ名山大川ノ神雲ヲ起シ雨ヲ降シテ天下ノ民ヲ潤スノミナラズ、斯ル不毛ノ窮村ニモ若干ノ人家ヲ建テ貧シカラヌ世營ヲスルモ是亦名山ノ神助ト太平ノ徳化トニヨルナラズヤ。是全ク東都億兆ノ商賈富岳ヲ信心スル所ノ因ニヨラズンバ何此里ノ賑フコトヲ得ンヤ」

山麓の寒村は講中登山に伴う収入に生活の糧を見出したと叔虎は指摘している。これは、観光、スキー、登山に依存する現在の山村の姿と類似しているといえよう。この頃の講中登山に伴う経費について、『隔搔録』には、山役錢一二二文、強力の傭錢四〇〇文、岩室の打火料一六四文、蒲団一つの借料一〇〇文と記されている。この頃の一〇〇

文は、現在の円に換算すると六六五円なので、当時の山村の人たちの収入源のおおよそを知ることができよう。

富士講の言い分

では、講中登山の人たちは、何を求めて富士山に登ったのだろうか。月所が名ざしで批判した身祿の言い分を記してみよう。富士講中興の祖身祿は、豊かな資産をなげうって富士信仰の生活に入り、富士登山をすること四十五度、六十三の年に入定を決意し、食を断つこと三十一日、七合五勺烏帽子岩の地で死んだ。身祿の富士登山に対する考え方は、その門人である藤四郎（行名は日行青山）が代弁している。

「世人仏法を信じて、極楽に往かんと願ふ者多し。然れど誰か一人極楽へゆきて見て来たる者なし。死しての向の事何ぞ頼みにならんや。富士は三国にてただ一箇の山にて、登れば最も天に近く、是れ則ち天上に生を得たる心地するなり。また、富士の八合目に当りて、夜月の来迎を拝する時は、月中に三尊の如来現れ給ひ、五色の雲たなびき、其の尊き事譬へんにもあらず。寔に極楽といふは、爰より外にはあらじと思ひ侍ふ。釈尊の説き給ひし極楽は、十万億土の末にありて、凡人の行きて拝むこと能はず。我々が信ずる富士山上の極楽は、一年に一度、つつ拝まるるを以て、只管富士へ参登つかまつりぬ。但し躬の行あしき悪

人の登山する時は、勿ち山あれ震動して、時によりては人を掴みて投げとおし、去方ゆきの知れざるも亦多し。是れ則富士の地獄なり。されば地獄も極楽もこの山に有りて外になし。是れ皆目の前見る所にして誣ふべからず。此のゆゑに吾們年々登山いたすなり」

藤四郎は生涯に、七十五度の富士登山を行なつたが、その理由を問われて、答えたのが前述の一節とされている。これは、天保六年（一八三五）に編さん板行された『百家騎行伝』の第二巻に「不二行者藤四郎」と題して収載されている。しかし、藤四郎は、天明二年（一七八二）に没しているのので、この答えは藤四郎の直談ではないかもしれないが、富士講の信仰理念はこれによくあらわれてゐる。編者の八島五岳（狂歌師で小説家）は、来迎といつても月の光に浮ぶ自分の影ではないかと皮肉っているが、五合目以上から見た眺望、特に、日出日没の際や月夜の光景はすばらしいらしい。私は、富士山には一度も登つたことがないので、山旅を好んだ儒者平沢旭山（沢元愷）の「登富士山記」から五合目月光の光景を描写した一節を紹介しておく。

「余適ま室を出て瞰むるに、雲間煜々然たり。正に是れ玉兔の海に浴するの時なり。覚えず大いに呼称して快よし。須臾にして三竿、世界變じて銀地と為る。是れ知らず白雲停りて動かざるか。但だ積素三尺、万有白玉を為すを

見るのみ。而して此の山大虚に孤立す。真に一朶の芙蓉の如く、大銀海中より湧出するなり。豈にまた是くの如き観有るや」(注五)

こうした高峰のもつ自然美が庶民の心をひきつけ、封建的抑圧の中で鬱々としていた民衆は、弥勒信仰に世直しの夢を求め、富士講は流行したのではなからうか。だから、寛保二年(一七四二)、安永四年(一七七五)、寛政七年(一七九五)、享和二年(一八〇二)、天保十三年(一八四二)、嘉永二年(一八四九)と幕府によって次々と禁止令が出て、富士講の普及を止めることはできなかった。それどころか、江戸では町人だけでなく、武士階級の中にも講に加わるものもあり、文化十三年(一八一六)には、「所謂八百八講の盛況を呈し、其徒を集むる七万と称せられ」(注六)る程となった。

月所は、潔癖の由に富士登山を行なわなかった。富士山でなくてもよいが、高峰大山に登り、大自然の美しさにふれたとき、月所はどのような山岳観を展開したのであろうか、私には大へん興味のそそられることである。

『隔搔録』の書誌学的考察

次に、当館所蔵の『隔搔録』の書誌学的な点に二、三ふれておこう。当館所蔵本の巻末には、「文化一四年丁丑小春情人書写 蜀山人」、「文政三年庚辰仲春臨写畢 正心齋」、

「文政九年丙戌十一月仲澣膳写凡二日一夜竣功 節齋運寿」、「文政一一年子年正月写畢 倉地言行」、「天保七申年六月写 伊藤祐之」の識語があり、何人もの手をへた転写本で、写し誤りや誤字も少くない。しかし、これが底本となり、『甲斐叢書』(昭和一〇年刊)の第七巻に翻刻されている。この翻刻は、読み間違いが多く、しかも、七合五勺の部分は写しもれで、残念ながら出来はよくない。

この『隔搔録』は、富士登山の案内記としては秀逸なので、現在、多くの写本が残されている。『国書総目録』によれば、内閣文庫、静嘉堂文庫、九大、教育大、東大、東大史料編纂所、東北大狩野文庫、立市刈谷図書館、神宮文庫図書館、無窮会神習文庫に所蔵されている。このうち、私が見たのは、内閣文庫所蔵の写本だけである。これは、文鳳堂雜纂の中の一冊で、当館所蔵のものより出来のよい写本といえよう。

なお、富士登山案内記としては、文久二、三年(一八七二、七三)頃の板行と思われる『不二山道知留辺』(松園梅彦輯、柳下陽眼閱、玉蘭斎貞秀画、須原屋茂兵衛等刊)という小型横本が有名であるが、その記述には、『隔搔録』の影響が多分に見られることを付記しておく。

『富岳雪譜』

もう一冊の写本は、『富岳雪譜』である。これは、江戸

期の富士登山記としては、最も面白いもの一つである。何よりも、信仰登山にとらわれず、自由闊達な富士登山をし、巧みな文章でそれを表現している。著者は、和久田寅（叔虎）、遠州松浜の武士であるが、履歴は分らない。享和三年（一八〇三）の夏、友人二人と須山口から富士登山を行なった。

陶（須）山村に到り、御師の家で先達の強力をやったが、強力とのやりとりが面白い。

「強力来テ曰各草鞋十足ヅツヲ齎ザレバ登降ノ用ニアツベカラズト、小橋浜村ノ二子ハ之ヲ聞テ各草鞋十足ヅツヲ買求タリ。余ハ独旅行ニ草鞋ヲ好ザレバ常ノ草履六足ヲ買テ他ノ草鞋十足ノ用ニアツベシトイヘバ、強力ガ曰客ハ数此岳ニ陞ルヤ、且初テナルヤト。余曰今ヲ初トス、此岳ノ峻易ヲ知ラズ、只他ノ山ノ例ニナラフノミト。強力ガ曰三國第一山ト標題シタル峻嶮ヲ陞ニ他ノ山ノ例ニヨルベキヤ況ヤ平地ヲヤ、衆人ノ所レ為ニ随フ可トスト。余ガ曰其好ム所ニ從シ艱ルトモ汝ノ足ヲ仮ズト。強力曰靈岳ニ陞モノ強言ヲ禁ズ、客ノ如キ初登ノ人ニシテ敢テ先達ノ辞ニ從ザルハ強トイフベシ。然ドモ客吾言ヲ用ザルベシ、但路峻ニ足疲労トキニ及テ、始テ吾忠言ヲモ思ヒ悔心ヲモ懷ベシトイヒツツ、頓テ草履六足ヲ買来リヌ」

しかし、五合目から砂礫の登りにかかると、二人の友人は草鞋の間に砂が入り、それを出するに若勞をするが、草

履ばきの叔虎は大した苦勞もなかった。登山口で叔虎を批難した強力に「草鞋ヲ買ザル強言ハ此アタリニテ思ヒシルコトヤ如何ニ」といつてからかっている。

五合目の岩室では、室の人に山中の水について質問しているが、その記述も面白い。

「窟人答テ曰此山砂皮厚シテ水湧出ル所ナシ、大雨トイヘトモ砂ニシミテ流レズ、只絶頂ニ一箇ノ寒泉アレトモ遠クシテ汲ベカラズ。故ニ巖間ニアル氷ヲ穿トリテ水トナシ、茶飯ノ用ニアツルナリ。サレバ古人ノ句ニモ富士室ヤ氷ヲ出シテ土用干トハ此事ナリトテ石窟ノ側ヲ指シ示シケルニ、桶ノ上ニ薦ヲ掛、三尺バカリナル氷ヲ載テ日ノテル処ニ置ニ、氷漸解テ半瘦タリ。熟視ニ氷ニアラズシテ雪ノ凝結タルコト粟粒ヲカタメタル如キモノナリ。実雪水ニハ垢汁アリテ五穀モ肥育トカヤ、サルカハリ此雪水ヲモテ烹トコロノ物茶ハイフニ及バズ飯粥ノ類マデモ味ナキコト甚シ。曾テ聞此山ニ炊ケル飯ハ火事場ノ粥ヲ啜カゴトシト」

また、八合目のあたりでの植物や蝶の観察もなかなか科学的である。

「一合ヨリ八合マデハ焼砂厚クシテ石骨ヲアラハス処スクナシ、且草木ヲ生ゼズ。但一合目ヨリ三四合マデニハ鈿砂ノ上ニ所々虎杖ト大薊トノ二種アルヲ見ルノミ。然ルニ虎杖ハ瘠テ高キコト二尺許、花紅白ノ二色ヲ雜テ尤愛ベシ。大薊ハ斯ル砂上ニ生ジナガラ其繁茂スルコト尋常ノ物

ニアラズ、大ナルハ方六七尺ノ間ニハビコリ、葉尖リ刺強シ。此ノ頭花ハ蕾ニシテイマダ開カズ。此二種ノ外絶テ他ノ草木ナシ。此二種モ三四合ヨリ上ハ見ルコトナキニ、八合ニ到レバ虎杖ハナクテ大薊バカリ岩間ニ生シテ甚瘦、地ニ平クナリテ蕾ヲモ含マズ。又此山ハ草木ナキユヘ万ノ鳥獸トモニ目ニサヘルモノナキニ、只奇ハ余八合ノ上ニシテ蝶ノ生出タルバカリナルヲミル。サレトモ寒ニ閉ラレテ飛コトモ能ザルベキスガタナリ、思ニ是必ズ人屎虫ナドノ類ヨリ化生シタルモノナランカ。然ラズンバ何物カ此生物ヲ化育センヤ」

八合目より胸衝の峻路をこえ、絶頂にいたり、「誠ニ雲ニ乗テ天上ニ遊ブ羽客飛仙ノ境界モ如斯モノナラン」と感激し、疲れた友人の荷物を肩にかつぎ、次のように記している。

「肌寒ケレバ陶山ニテ仮タル絮衣ヲ套服シテ、件ノ草履バキニテ平地ヲ歩ガゴトク峻ニセマレバ小橋(友人の名)ノ腰ヲ推シ、憩息ノ間ハ巖頭ニ登テ礫打ナドシ、或行々小謳ナド唄テ興ジケレバ、初陶山ニテ諍タル強力モ、今ハ余ガ脚力ノ疲ズ、草履モヌガザルニ服シテ、アハレ客ハ飛仙ニモ近カルベシ、役ノ行者ノ再生ニテアルナラント歎ジケリ」

自由瀾達な登山

信仰登山では、山頂で声をたてたり、石をなげることには、山神を怒らすものとして禁じられているのに、タブーを恐れぬ叔虎の態度は、山登りそのものを楽しむもので、近代登山を考える上で興味深いものといえよう。

このように瀾達な富士登山を行った人の一人に川村錦城がいる。奥州出身の医師錦城は大へんな山好きで、谷文晁に天下の名山を画いてもらい、朝夕それを眺めていたが、後に三巻にまとめ、『名山図譜』(のちに『日本名山図会』と改題)を刊行した。肥前平戸藩主松浦静山の著わした『甲子夜話』には、錦城の富士登山の態度を次のように記している。

「寿菴は殊に富岳を好み幾度か登れり。居宅の楼上に架を作り、名は火見と称し実は眺岳の為に設く。朝起くれば先づ架に上りて岳を看、それより日用の事に就く、生涯かはることなし。晩年本所に退居して人を避け、名山図を刻行す、画は文晁にかかしめしが、山形はみづからの指点なりとぞ。岳に登るときは必ず魚味を携へ、窟室中にて用ゆ、道家叱すれども肯ぜず。岳巔の高は人声さへ禁ずると云に、いつも石に踞して笛を弄し、数曲を関て山を下る。先達と呼ものも如何ともすること能はざりしとなん」

錦城の富士登山の態度は、生臭物を持参するなど叔虎の

態度よりもさらに闊達である。

富士講における行を俗信的なものとして強く反撥した人に池川春水がいる。春水の『富士日記』（高知県立図書館山内文庫蔵 写本）には、次のように記されている。

「頂上への登り始にも柵を結び、入り口に人居て手水を売る。参始めの薬師とてあり。我にも拝めといへど、素此山に來りしは日本無双の名山なれば見に來りし計にて、浅間へ詣む深願もなければ、答ていわく、我は浅間様計志し参たり。薬師は信仰にもなし、といふて行過く。凡如此所袖を引、錢を貪る所甚多し。先達がいわく、その様に申さる故、山にも当りたるといふ。我いわく、我は山に當りたるにあらず。きのふの大暑に當り薄食、夕部の寝冷にて頭を病也。浅間様に心があれば悪みはなされぬ筈と答ふ」〔七七〕

これは富士講に対する批判というよりは、神仏習合的な俗信に対する烈しい反撥であり、否定ともいべき態度であるろう。春水は高知の下級武士の次男として生れ、医師となり、明和五年（一七六八）、富士登山を行ない、その際の紀行が『富士日記』なのである。

このように見てくると、講中登山によって登山は庶民の間に普及し、多くの人々が富士登山を行なった。しかし、富士講の中には、行きすぎた加持所禱や金もうけの色彩の強い「行」もあり、これらの批判の上に、純粹の自然美・

山岳美を求めて登山をする近代的な風潮が育っていったと
いってよいであろう。

『富岳雪譜』の書誌学的考察

当館所蔵の『富岳雪譜』は三巻ものの写本で、上・中巻は、遠州和久田寅叔虎著、平安東籬静謐廬校の『富岳雪譜』で、下巻は、『富岳雪譜』となつてゐるが、高田与清撰の『富士根元記』で、古今の文献を引用して富士という名称をもつ諸國の山を紹介している。三巻とも、北総古河市川其融画 吉川蔵六筆書と記されており、写本としての出来はよいといえよう。

『国書総目録』によれば、別の写本が西尾市立図書館岩瀬文庫に所蔵されている。昭和三年から四年にかけ刊行された『富士の研究』（全六巻 古今書院刊）の編集主任であった東京帝国大学史料編纂官井野辺茂雄氏は、この文庫について、次のように記している。

「岩瀬氏は三河西尾の富豪にして、岩瀬文庫の設立者たるは普ねく人の知れる所、其文庫には旧水戸の碩学青山氏の家に伝はれる、富士に関する蔵書数十部を蔵す。本書の編纂または此の文庫に負ふ所が多い」〔七八〕

あとがき

月所は、富士に一度登らぬ馬鹿、二度登る馬鹿という甲

斐の俚諺を紹介した上で、登らずに書くのも一癖かと記している。だから、自分の記した『富士山上略記説』に『隔搔録』（隔靴搔痒録の略であろう）と名づけたものと思われる。

私は、最近、凜冽な空気の富士吉田で、雪をかぶった秀麗な富士山を間近かに眺める機会にめぐまれた。山頂近く稜線にぶつかかる気流は雪煙のような雲となり、真青な空に白の色どりをそえていた。この冬一番の冷えこみにもかかわらず、しばらく、その美しさに時のたつのを忘れて見ほれていた。私も富士には一度も登らぬ馬鹿の一人であるが、このように完成された自然美を見ると、月所が富士に反撥しながら、それにひかれた気持がよく分かるような気がする。

わが国では、山と人間とのかわりあいの歴史は大へん古い。農耕の守護神として、死者の眠る神聖な地として、古代から山は崇拜の対象であった。ついで、山岳信仰の発達に伴い、多くの高山が開山され、江戸期に入ると、山廻り役や本草学者、文人、墨客の登山が行なわれる一方、多くの庶民が講中登山を行ない、山岳の靈氣にふれ、心身を浄め、五穀豊穰、家内安全を祈った。また、山の雪形は農時の目安であり、山は天候の変化の兆であり、沖合での漁業の目標ともなった。さらに、獵師や岩茸採りなどにとっては、山は生活の場そのものでもあった。

こうして、日本の山々の多くは明治期までに登られ、かなりの数の文献が残されている。今回紹介したのは、僅か二点ではあるが、両者とも、日本の登山の歴史の一端を浮きぼりにする興味深い文献といえよう。

注

(注一) 松本定能 『甲斐国志』 甲陽図書刊行会 明治四四、四

五 下巻卷末 編輯の次第 二二頁

(注二) 遠藤秀男 『富士山の謎』 大陸書房 昭和四九 二〇五

頁

(注三) 岩科小一郎 『山の民俗』 岩崎美術社 昭和四三 六四

～六五頁

(注四) 『吉江喬松全集 第六卷』 「自然美論」 白水社 昭一六

一一二頁

(注五) 原文は漢字。この読下し文は、次の文献による。志賀重

昂 『日本風景論 下』 講談社学術文庫 昭和五一 一五頁

(注六) 井野辺茂雄 『富士の信仰』 名著出版 昭和四八 二二

一頁 (昭和三年刊の複製版)

(注七) 『日本庶民生活史料集成 第三卷 探検・紀行・地誌 東

国編』 三一書房 昭和四四 三七七頁

(注八) 井野辺茂雄 『富士の歴史』 名著出版 昭和四八 五〇

一～五〇二頁 (昭和三年刊の複製版)

(すみにたに・たけし 法律政治課主査)